維摩経義疏における「上弘仏道・下化蒼生」について

臼田淳三

聖徳太子の撰述として古来伝承されて来た維摩経義疏には何回か「上弘仏道・下化蒼生」という句が用いられている。この句は維摩経義疏以外にまつたく見られないというものではないが、この義疏ほどしばしば用いられている例は見出せない様であり、維摩経義疏を理解する上の一つの手がかりとして取上げることが出来る。

「上弘仏道・下化蒼生」は、大乗菩薩道を表す標語である「上求菩提・下化衆生」と良く似た表現である。この大乗菩薩道の標語は「上求菩提」により自利行を、「下化衆生」によりて利他行をいい、自利利他の二行を実践する菩薩道が簡明にあらわされている。ところで、この現在では普通に用いられている「上求菩提・下化衆生」の句が、いつ・誰れによつて使用され始め、一般に使用される様になつたのがいつ頃なのかは確定されていない様であるが、同様な表現で自利利他の二行をあらわすことはかなり古くよりなされていたと考えられる。中国南北朝時代の注釈書には「上求仏慧・下度群生」[1]とか「上則求仏身・下則化物」[2]とかいう表現が見出され、いずれも発菩提心の説明としてあらわれている。

維摩経義疏においても「一云」として義疏撰述当時に著者が参考とした或る一注釈書の解釈を引用している中に「上求仏道」「下化蒼生」という使用が見出されるとともに、菩提心の説明においては「上弘仏道・下化蒼生」という表現がある。それ故、維摩経義疏において「上弘仏道・下化蒼生」の句が自利利他の二行をあらわしているという解釈が成立する様に思え、事実その様に解した論が展開されてもいる。その時、「上弘仏道」と「弘」の字が使用されていることは「求」を誤つたのだと解するか、或いは「求」というべき所の自利行にも利他的意味を持たせて解したいという著者の心情のあらわれとして「弘」の字が用いられているのだという解釈がなされている。その前提としては自利利他の二行を表現して「上求菩提・下化衆生」という句がかなり一般的に使用されていたと考えることがある。しかしその前提は検討して見る必要がある様だ。

維摩経義疏において行は自行即ち自利行と外化即ち利他行との二つに分けられている。「下化蒼生」が「下化衆生」と同様に利他行を表現しているという事には何ら問題はなく、「上弘仏道」の意味する所が問題となる。自行と外化に分けられている所では「上弘仏道」が外化において用いられている例が三回見られる。他に一回「但私懐者」として義疏の著者が自分自身の見解をのべている所では、経文を解して「自行外化を兼ねるというべき」といい、その中を二つに分けて、その一を「上弘仏道慈心与楽」となし、他を「下化蒼生悲心抜苦」となすといつている。この点よりすれば「上弘仏道」にしろ、「下化蒼生」にしろ自利利他の二行に亘るものとしてとらえねばならない。また、「慈」なり「悲」なりで説明が与えられている故、利他的意味が強いと考えられているという事ができる。また自行を明すとされる所においては「上弘仏道」の句を用いていないことをも考え合せれば「上弘仏道」が自利行のみを表現し

たものと考えることは決してできないのである。

この様に利他行をいいあらわしていると考えられる「上弘仏道」の具体的な行為を見出しうる経文をあげれば次の四つの句である。一、能師子吼名聞十方。二、紹隆三宝能使不絶。三、演法無畏猶師子吼。四、念報仏恩不断三宝。この四つの句をまとめれば「説法」と「興隆三宝」との二行になる。このうち「興隆三宝」は維摩経義疏においては法宝が中心であり「経教を弘通する」ことによってなされるとされており、説法行によってはじめて可能となるのである。それ故、「上弘仏道」の中心として「説法行」をあげることができる。しかし、全ての説法行が「上弘仏道」というわけでもなく衆生の苦しむ相を知りそれに対応する薬を知りてなされる「抜苦」としての説法行も認められており、それは「下化蒼生」という面でとらえられている。

次に教化の場所としての国土との関連を考察すれば、国土には二種類が認められている。それは如来の応土と衆生の報土との二土で、この二土は仏・菩薩が教化を施す場所として仏土となるのである。仏・菩薩は本来己の土としての実土を持たないとされながらも、この二土を取るのは「上弘仏道・下化蒼生」のために外ならないと釈される。衆生の報土は衆生の善悪によって感じられるものであり、そこでの仏・菩薩の教化は衆生の苦しみと苦しみを同じくしてなされるものと考えられ抜苦という教化の方法をとり得る故、「下化蒼生」という利他行を衆生の報土でなし得るのではないか。また、応土は如来の神力によりて現われているもので、衆生をして応土を願わしめることによりてなしうる故、如来の応土における教化は、与楽の面でとらえられるのではないか。そうであれば応土における教化は正に「上弘仏道」という説法行によると考えてよい。

以上の如き内容を持つ「上弘仏道」は、自利行を表現している「上求菩提」とは関係ないものとして論じなければならない。それではこの表現が維摩経義疏の著者の独自のものかといえば問題は少し複雑である。維摩経義疏において「下化群生」「上弘仏道」を明すと解されている経文に、嘉祥大師吉蔵が「明於下化」「辨於上弘」[3]という注釈をなしている。この二つの注釈の関係は吉蔵の言葉が省略形であつて彼の参考とした注釈書の中にすでに「上弘云々」という表現がなされていたと考えられる。それ故、維摩経義疏が聖徳太子の撰述でなく中国人の手になるものであれば、吉蔵がこの義疏を参考として「下化」「上弘」の表現を用いたとも考えられる故、「上弘仏道」という表現が著者の独創ということも可能であり、吉蔵以前の注釈ということができる。また、維摩経義疏が聖徳太子の撰述であれば吉蔵の参考となつたとは考えられない故、太子が撰述当時に参考とされた中国の注釈書の中にすでに「上弘仏道」という表現があり太子も吉蔵もそれを受けついだと考えられる。

結局、維摩経義疏における「上弘仏道・下化蒼生」はその言葉通りの内容をもつて使用されているものであり、義疏の著者が聖徳太子であろうと、なかろうと吉蔵以前の注釈学を受けて成立しておりその頃の維摩学の解明が維摩経義疏を研究する上に必要な仕事である。

1　大般涅槃経集解巻第八　大三七・四一三下。

2　敦煌出土ペリオ蒐集 ch. 二二七三「維摩詰義記巻第一」（大統一四年写本）。

3　吉蔵撰「維摩経義疏」巻第一　大三八・九二〇下。